

謙讓の補助動詞「給フ」の衰退に関する一考察

野 沢 勝 夫

一 はじめに

本稿は謙讓の補助動詞「給フ」(下二段)について、まず院政期の『今昔物語集』にその盛行を見、次いで鎌倉期の『宇治拾遺物語』の「同文的同話」に資料を求めて両集における「給フ」の使用実態を比較、観察し、よって「給フ」の変化・変容を探ろうとするものである。

中古の仮名文に、自己の動作に関わる特定の動詞―「思ふ」「見る」「聞く」(以後、「上位動詞」と呼ぶ)などに付いて、尊敬すべき相手に対する謙讓(一説に丁寧)の意を表す補助動詞に「給フ」があり、下二段に活用した。最古の仮名書(万葉仮名)の散文と目される「正倉院文書」に

ふたところのみみもとのかたち支支多末部(聞き給へ)にたてまつりあぐ

とあるのが、それと認められている。また、宣命・祝詞(『続日本紀』)に見られさらに平安朝の物語、女流日記に頻用されたことはよく知られているところである。しかし、院政期の今昔物語集には相当数の用例が見られるが、鎌倉期以降は急に衰退し、宇治拾遺物語などの説話類や増鏡などの和文脈の作品のなかに命脈を保った。^{〔注1〕} また、その活用が下二段から四段へと変化、混同していった事実も知られている。「給フ」の変化・変容に関する先行研究として、同一内容の文献を

時を隔てて書写し成立した二つの資料―「源氏物語」と「仮名書き法華經」―についての調査例を顧みたい。

「源氏物語」の代表的な二種の伝本として、「青表紙本(藤原定家の書写校合した本、元仁二(一二二五)年)」と「河内本(河内守源光行、親行の校訂本、建長七(一二五五)年)」がある。両本を比較した結果、「青表紙本」に見られた謙讓の「給フ」(下二段)五二一例は「河内本」では四七七例に減じ、他の四十四例は次のように変化・変容しているという。^{〔注2〕}

〈青表紙本〉		〈河内本〉	
給フ	↓	給フ	(下二段) (四七七例)
給フ	↓	侍り	(一五例)
給フ	↓	給フ	(四段) (一一例)
給フ	↓	〈ナシ〉	(一一例)
給フ	↓	奉る	(四例)
給フ	↓	まゐる	(二例)
給フ	↓	宣ふ	(二例)

次に「仮名書き法華經」四種の伝本に「給フ」の消長を辿ってみたい。「仮名書き法華經」は「妙法蓮華經」の訓点本の延べ書きに始まり、法華信仰の時代の要請に応じて書き継がれたもので、書写成立した時代の言語の反映が認められる点が語彙・語法の変遷を通時的に観察する

ためには恰好の国語資料たりうるものである。

現存する最も古い完本と目される『妙一本仮名書き法華經(鎌倉初期、書写成立)』^(注3)には「(世尊ノ御説ヲ)聞キ給フ」の形で16例が認められる。『妙一本』を受け継ぐ同系の『足利本(元徳二(一三三〇)年の識語を持つ)』^(注4)においては、この「給フ」が無敬語2例、欠文1例を除き―すべて「下二段」から「四段」へと変化しているという顕著な事実が観察される(これは謙讓の「給フ」の四段化が完了した時期を示す貴重な資料である)。

室町末期の書写本『月ヶ瀬本』^(注5)では「給フ」の使用の見られない無敬語が11例、「奉る」に置き換えられているものが4例、「給ふ」「四段」が1例となっている。

『西来寺本』^(注6)は江戸後期の書写本だが、宗淵なる学僧が現存しない過去の法華經の訓法を博搜し傍記に残している点が「給フ」の変遷の跡を窺う好個の資料となっている。『西来寺本』の本文と傍記に見られる「給フ」は次のとおりである。

「給フ(下二段)」は1例のみ。

「給ふ(四段)」が8例(うち、傍記に「給ふ(下二段)」とあるものが5例。「給ふ(下二段)」と「奉る」の二種の傍記を持つものが1例)。

「奉る」が2例(うち、「給ふ(下二段)」の傍記を持つものが1例)。

「無敬語」が5例(うち、「給ふ(下二段)」の傍記を持つもの1例、「奉る」の傍記を持つもの1例)。

〈詳細は『仮名書き法華經』研究序説』一九頁に表す〉

右の二つの資料―「源氏物語」と「仮名書き法華經」の書写本―についての調査例からは「給ふ」の衰退の過程には一つにはその使用の見られない無敬語表現の出現があり、他には別な敬語(謙讓または丁寧)に代替される様相が認められた。また「給ふ」の四段化の時期が明らかにされた。

書写本は、それが原姿を正確に伝え得ていない点で、文献的な価値は劣るものとされる。しかしそのズレのなかに書写時における言語の反映があるとすればそれは新たに国語史資料としての資格を担い得る。前掲の「源氏物語」と「仮名書き法華經」の書写伝本はこの意味で国語史資料として有効であった。ここで取り上げる「同文的同話」はもとより「源氏物語」と「仮名書き法華經」の場合のような同一文献の書写ではないが、ほぼ同様な内容を伝えるものである点で同様な類似の言語表現の見られることが期待される。この点に着目し、平安末―鎌倉期にその変化・変容が指摘されている「給フ」の使用実態を比較、観察しようと試みるものである。

今昔物語集の成立期については院政期の半ば近く(一一三〇年頃)とみるのが妥当であろう。宇治拾遺物語の成立期については諸説あるが、「後鳥羽院の御時云々」の語句があることに拠れば承久の乱(一二二一年)の後と考えられ、さらに「後鳥羽院」の呼称にこだわるならば仁治三(一二四二)年以降になるが、両説話集の成立期の間には概ね百年の隔たりを認めることができる。

以下には、まず今昔物語集(元話、一〇二〇話)と宇治拾遺物語(一九七話)における「給フ」の全用例を吟味、検討し、次いでそれらの同文的同話のなかの「給フ」使用の有無、異同等について比較、観察を試みたい。まず、今昔物語集の給フの用例を整理して示し、後にコメントを付す。

二 今昔物語集のタマフ

今昔物語集の文章には卷二十あたりを境として前半で漢文訓読調が強く、後半で和文調が強いという顕著な対立があることが知られているが、「給フ」の使用も後半(本朝世俗部)に圧倒的に多い。前半には

三例(全九五例中)が見られるにすぎない。

検索は馬淵和夫編『今昔物語集自立語索引』(笠間書院・昭和57)により、引用本文は『新日本古典文学大系本』によった。問題のある用例については個別に後記した。また、用例はすべて会話文のなかだが、始め終わりの引用符は省略した。二重括弧に相当する部分に「」を施した。

▽ タマヘ 〈未然形〉

- 1 王、我レニ絹三十疋与へ給フト云へドモ、我レ固ク辞シテ不請給ズ ② 一六五・6
 - 2 何デカ児ヲ殺シ奉ラムトハ思給ヘム ④ 五二五・7
 - 3 今夜ハ御宿直仕リテ、朝見給ヘム ④ 五二七・13
 - 4 己レ更ニ人ノ御マシマシケル所ト不知給ズ ⑤ 一一九・10
 - 5 □□ガ葬料ヲ給ハリテ、恥ヲ不見給ヘズウラヤマシク候也 ⑤ 二二五・15
 - 6 盗人仕ケルヲモ不知給ヘズ、只敵討ゾト思テ ⑤ 三〇三・1
 - 7 人不寄来ザラム所ニテヤスラカニテ見給ヘムト思給ヘテ ⑤ 四五一・10
- ▽ タマヘ 〈連用形〉
- 8 我レ思給ヘル所ハ、「七日、此ノ国ノ王ニ着ム」ト、大王許シ給ヘ ① 八二・4
 - 9 万歳千秋ノ間、朝暮ニ仕ラムコトコソ思給ツルニ ③ 一〇・6
 - 10 御前ノ御事ノ不審ク思給シカバ、罷リ上テ候 ④ 一二七・12
 - 11 若君其咎ヲ蒙ラセ給ヒシダニ嘆キ思ヒ給ヘ候シニ ④ 一四三・10
 - 12 後生ヲダニ助ラムト思ヒ給テ ④ 一五二・12
 - 13 出家シ候ナムト思給ツルニ ④ 一五二・12
 - 14 此ク思ヒ懸ヌ物ヲ主ノ給テ候ヘバ、無限ク喜ク思給テ ④ 一五二・12

- 15 「倒レモコソ仕レ」ト思ヒ給テ ④ 一五二・14
- 16 此ク被擲レ奉テ、悲キ目ヲ見給ツル也 ④ 一八四・10
- 17 年来思給ヘツル本意アリ ④ 二二五・13
- 18 年来ハ妬ク思給ツレドモ ④ 二二三・6
- 19 水瓶飛ビ来テ、水ヲ汲シヲ怪シク見給ヘテ ④ 二三四・7
- 20 御ツルヲ見給ヘテ、試ミ申サムト思テ ④ 三〇一・11
- 21 此ク極キ目ヲ見給ヘツレバ ④ 三〇一・11
- 22 殿ヨリ仰セ給ハムズラムト思ヒ給ヘテ ④ 三〇六・9
- 23 待候ツルニ、音無ク候ヘバ不審思給ヘテ ④ 三〇六・9
- 24 走懸テ詣来ルヲ盗人ナメリト思給テ ④ 三五三・5
- 25 敵ニテ仕タリケル事也ト思給テ ④ 三五三・7
- 26 シヤ頸取ラント思給テ候フ也 ④ 三五三・7
- 27 今ハ然リトモ出サセ給ヌラムト思給テ ④ 三五六・14
- 28 錯申サムト思給ヘルガ愚ニ候ケル也 ④ 三六二・3
- 29 朽木ナドラ碎ク様ニ、手ヲ以テ押碎キ給ツルヲ見給ヘツレバ ④ 三七五・8
- 30 腕折リ被碎レヌト思給テ、逃候ツル也 ④ 三七五・9
- 31 極キ質ヲモ取タルカナト思給ツルニ ④ 三七六・2
- 32 小全事習ヒ奉ラムト思給テ、参リ候ツル也 ④ 四一二・11
- 33 試ミ奉ラムト思給テ、参リ候ツル也 ④ 四一三・11
- 34 其歌ハ心憎ク思給ヘ候ツルニ ④ 四四七・3
- 35 然様ニヤ思スラムト思給テ ④ 五二二・7
- 36 勘当有ト承ハレバ、恐レ思給ツルニ ④ 五二二・12
- 37 殿ノ御マシマシケルトコロト不知給シテ ⑤ 一四・10
- 38 然レバヨト思給テ ⑤ 一四・12
- 39 希有二御指貫ノ扶ヲ見付候テ急ト思給ヘツル様 ⑤ 一四・13

- 40 人違へ仕タラムハ極カルベキ事カナト思給ヘテ ⑤ 一四・15
 41 生死モ只仰ニ随ハントコソハ思ヒ給ヘ候ヘ ⑤ 一八・1
 42 姫君ノ御為ニハ吉ク候ナンカシト思給ヘ候フヲ ⑤ 一九・5
 43 久ク不見バ不審クテ、見ント思給ヘツル也 ⑤ 二五・6
 44 金ノ候ナメリト見テ給ヘシ所ノ候シヲ ⑤ 六五・10
 45 試ムトテ思給ヘ申タリツル事ヲ ⑤ 七三・1
 46 大キナル嘆キト思給テ、愁ヘ申サムガ為ニ參テ候フ也 ⑤ 一四八・10
 47 □□ガ様ニ葬料給ハリ候ヒヌベカメリト思給ヘテ ⑤ 二二六・1
 48 若シ昔ノ心ハエ不失ズモヤ候フト思給テ ⑤ 二四三・4
 49 此マデ下申テ候コソ心ノ内ニハ奇異ク思給ヘ候ヘ ⑤ 二五二・15
 50 極ク難堪氣ニ思給ヒタリツル氣色ヲ見給ヘテ ⑤ 二七五・8
 51 己ハ聞置タル事ノ侍レバ、試ムト思給テ ⑤ 二七五・8
 52 御シ遂ゲム事難有シト思給ヘテ ⑤ 三〇一・5
 53 不隠レ申シ不候ジト思ヒ給テ ⑤ 三〇一・7
 54 聞セ不奉ラデハ何カデカト思ヒ給ヘテマム ⑤ 三〇八・11
 55 此ノ乗セ給ヒタル栗毛ノ御馬ハ極キ一物カナト見給テ ⑤ 三二五・5
 56 此レニ罷乗テ罷ラバヤト思ヘ給テ ⑤ 三二五・6
 57 告申シテ逃テ罷ナムト思給ヘテナム ⑤ 三二五・10
 58 怪ト思給ヘテ、構テ築垣ヲ超テ出候ヌルニ ⑤ 三六一・2
 59 殿モ何方成セ給ヌラムト悲ク思給テ、 ⑤ 三六一・4
 60 若シ然ニヤ思給ヘテ、走り參ツル也 ⑤ 三六一・5
 61 其レガ極テ見マ欲ク思給ヘ候シカバ ⑤ 四五一・8
 62 罷出テ見給ヘムト思給ヘシニ ⑤ 四五一・8
 63 被踏倒テ死候ナバ、益無カリケムト思給テ ⑤ 四五一・9
 64 人不寄来ザラム所ニテヤスラカニテ見給ヘムト思給ヘテ ⑤ 四五一・9
- ▽ 65 タマフ ⑤ 四五一・10
 明日參テ自ラ申サムト思給フ
 ▼ タマフル ④ 一一九・11
 66 此ノ国ニ迎講ト云フ事ヲナム始メムト思給フルヲ ③ 四一一・9
 67 己ガ父ノ有様ヲ見給フルニ、極テ悲キ也 ④ 一一七・9
 68 後ノ世ニ何許ナル苦ヲ受ズラムト思給フルニ ④ 一一七・16
 69 此ノ次ニ此ル事ヲナム思給フル ④ 一二〇・2
 70 今ハ法師ニ成ナムト思給ルヲ ④ 一二〇・14
 71 此ク心細クテ御スヨリモ吉キ事トナム思ヒ給ル ④ 一二四・16
 72 此ノ白髪ノ少シ残タル、今日刺テ御弟子ト罷成ラムト思給フル也 ④ 一五〇・13
 73 己ガ心ニモ然思給フル事也 ④ 三二一・10
 74 寒サ難堪ク候ヘバ、其奉ル御衣ヲ一ツ二ツ下シ候ハムト思給ル也 ④ 三六三・16
 75 我レモ然思給フル事也 ④ 四九六・15
 76 彼レ召テ問ハムトナム思ヒ給フルト ④ 五〇一・7
 77 今日ヨリナム心安ク喜ビ思給フル ④ 五二二・12
 78 今日ナドコソ人不騒候フニ相構ヘント思給フルヲ ⑤ 一九・6
 79 此ク御マセバ添ク所セク思給フル也 ⑤ 九五・11
 80 物超シニ対面シテ、事ノ由ヲモ申シ侍ラムト思給ルヲ ⑤ 二〇一・14
 81 被仰ル事極タル道理ニ候フ。推量リ思給フル事也 ⑤ 二〇四・1
 82 此レ勲ニ吉ク供養シ奉ラムトナム思ヒ給フル ⑤ 二〇八・5
 83 見給フルニ、糸皮□キ事ニテ候ヘバ ⑤ 三二五・9
 84 己ハ西ノ国ヨリ罷上テ京ノ方へ行カムト思給フルニ ⑤ 三三一・10
 85 此ノ御寺ノ辺ニ暫シ候ハムトナム思給フル ⑤ 三三一・11

- 86 彼等ガ顔ヲナム今一度見ムト思給フルヲ ⑤三五二・14
 87 姫御前ニ申サムト思給フルヲ、其の事申給ヘ ⑤四二〇・14
 88 不人伝デ細カニ申サムト□ム思給フル ⑤四二一・1
 89 賤ノ童部ニ物見セムトナム思ヒ給フル ⑤四四七・10
 ▼タマフレ

- 90 仏ノ御坐ケム御有様極テ恋ク思ヒ給フレバ ①三一〇・7
 91 法師ニ成テムと思フ心付ケムト思給フレド ④一一八・1
 92 今日ニテモ罷返ナムト思給フレドモ ④一一九・13
 93 相構テ打チ伏セテ候ヒツルガ、今朝見給フレバ ④三五三・6
 94 其夜、徒ニ成ナマシカバ、今マデ此テ侍ラマシヤハト、思給フレバ、無限ナント書タリ ⑤七九・7
 95 申シ候ニ付テ慎シク難堪ク思給フレドモ ⑤三〇一・2

なお、右の用例数95の数は他の調査とは小異する。^{注7}また、次の用例(巻二十二第7話)は主語が藤原高藤(後の内大臣)であるから、この「給ヘ」は「給ヒ」の誤りとみて採らない。

前世ノ契深クコソハ有ラメト思給ヘテ

④三三五・13

以下、今昔物語集に見られる「給フ」について摘記する。

- (1) 命令形以外のすべての活用形が見られる。

「給フ」はその語性から命令形の存在は考えられない。終止形は中古には稀(源氏物語の一本(湖月本)に見える)とされているが、終止法の用法がみられる。また、中世には見当たらない未然形^{注8}の用法も多い。

- (2) 上位動詞の種類が多い。

上位動詞は「思ふ」が圧倒的に多く、源氏物語と同数の四種の語に及ぶ。「聞く」を欠き他に例のない「請ふ」が見られる。

- (3) 自分以外の者の動作につく用法が見られる。

用例26は「自己側の者と把握された人の動作の動詞に付いて謙譲を、したがって聞き手への敬意を表現する用法(新潮古典集成『今昔物語集』③「一六九頁注14」に該当する。

- (4) 手紙のなかに用いられた用例が見られる。

用例94「底ニ立文有り。披テ見レバ、糸悪キ手ヲ以テ、仮名ニ此ク書タリ」に続く部分で、手紙のなかに用いられた用例である。

- (5) 「思給ヘル」という語法がある。

既に指摘されているところだが、^{注9}完了の「リ」が下二段(連用形)に接続する先駆的な用例として注目される。

三 宇治拾遺物語のタマフ

検索は増田四郎・長野照子編『宇治拾遺物語総索引』(清文堂出版・昭和62)により、引用本文は『新日本古典文学大系本』によった。

▽ タマヘ 〈連用形〉

- 1 とかくやせましと思給つれども 〈六一・2〉
 2 しかく思給てなん、かいなを引しめて候。 〈六五・5〉
 3 その苦をまぬかれて、うれしと思ひ給しかば 〈一一七・7〉
 4 知らせ給たるらんとこそ思ひ給へしか 〈二七八・4〉
 5 年比も、いかでかおはしますらんと思給へながら 〈二二七・1〉
 6 走続きてまうで来つるを、盗人なめりと思給へて 〈二八三・8〉
 7 かく思かけぬ物を給たれば、限りなくうれしく思給へて 〈三〇五・7〉
 8 殿よりもさだめて候なと思給て 〈三六五・3〉
 9 みな申候へば、おぼつかなく思給て参候つる也 〈三六五・4〉

▽ タマフ

10 御心ざしの程は、返くもおろかには思給まじけれども

〈二二八・12〉

11 なにがしを、見なしと思給ふべきやつ原にてさぶらひければ

〈二八三・9〉

▽ タマフル

12 御さまなども心憂く侍れば、奉らんとこそ思ひ給うるに

〈二二八・8〉

13 たゞ別聞えなんずと思ひ給ふるが、いと心細く、あはれなる

〈二五二・12〉

14 その奉りたる御衣、一二おろし申さんと思給なり

〈三五〇・1〉

▽ タマフレ

15 田ならば何にかはせんずると思給ふれど

〈一九〇・4〉

16 敵にて仕りたりけるなめりと思給れば

〈二八三・10〉

以下、宇治拾遺物語に見られる「給フ」について摘記する。

(1) 上位動詞「思ふ」に接続する用例のみであることが特筆される。

次に資料ごとの上位動詞とその用例数を表示しておく(源氏物語〈青表紙本〉は根来司氏の調査^{〔注10〕}による)。

	源氏物語	今昔物語	宇治拾遺	仮名法華経
思ふ	四三五	七七	一六	〇
見る	八六	一四	〇	〇
聞く	六	〇	〇	十六
知る	一	三	〇	〇
請ふ	五二一	九五	一六	一六

(仮名法華経は「妙一本」^{〔注3〕}による)

(2) 中世には用例がないとされていた「給フ」の終止形が見られる。

用例11については「思給ふべきやつ」の敬語法に誤あるか(旧大系本三三三頁)、また「思給ふべき」は「思給ふるべき」とあるべき

ところか(新大系本二八三頁)とされているが、自己側の者と把握

された人の動作の動詞に付いて、聞き手への謙譲の意を表現する用法の終止形とみてよい。集中に他(用例10)に終止形の用法があり、

また『十訓抄(序文によれば建長四(一二五二)年成立)』にも次のように終止形(終止法)の用例が見られる。中世に終止形が存在したことは確実である。

ツクくトマホリテ、「シカサマニ候ト見給」ト申ケレハ

〈古典文庫本『十訓抄(片仮名本)上』六七・10〉

(3) 通説どおり、未然形の用例は見当たらない。

(4) 自己以外の者の動作の動詞に付いて、謙譲の意を表す用法がある。前掲の用例11がこれにあたる。

(5) 女性語としての用法が見られる。

「給フ」の用法については「給フ」は男性のあいだに多用されへだたりをもったかしこまったことばと解説され、^{〔注11〕}今昔物語集ではすべての用例に該当するが、用例5・10・11は女性(観音菩薩の化身)が主語(会話主)となっている。

(6) 活用が下二段から四段へと変化、混同していった事実は認められない。

四 今昔物語集および宇治拾遺物語の

同文的同話の比較、考察

今昔物語集(完話一〇二〇話)と宇治拾遺物語(一九七話)との間には八十四組の「同文的同話」を認めることができる(『新日本古典文学

大系」「新日本古典文学全集」及び「日本古典文学集成」の巻末の解説等を参照)。「関連話」はさらに多いが、語句・表現のレベルでの一致度を求めてストーリーがほぼ全同のものに限定した。これ等のうち両者(または一方)に「給フ」の使用が見られる十三組の「同文的同話」が考察の対象として選ばれる。

説話文献を国語資料とする際には、その表記様式による文体や語彙の問題が付き纏う。ここでは会話文に含まれる敬語のみを対象とする。ただ、「同文的同話」でありながら両説話集の間には「給フ」の使用される文脈的な環境が異なるケースが多い。今昔物語集が会話多用する語り口であるのに対して宇治拾遺物語(および他の多くの鎌倉説話集)は同一の説話の内容を簡約化した筋運びで語る手法が目立つ。会話はあっても短小の場合が多い。13組の「同文的同話」中の「給フ」を観察するに際しては、対応する類似文脈のなかで同一の上位動詞が用いられている28箇所に関り対象とする。

以下にはその13組の「同文的同話」を今昔物語／宇治拾遺の順に、文意が理解しやすいよう前後の文脈を含めて長めに引用して再掲して示す(①⑧⑨については話中に「給フ」の現れる箇所がかけ離れているため(1)(2)と分けて扱う)。また引用ごとに「給フ」を含む箇所(或いはその対応箇所)を「今昔物語／宇治拾遺物語」の形で整理・対比して添示し、引用の末尾にその結果を一括して再掲する。

① 越前国敦賀女、蒙観音利益語 十六卷第7

- (1) 年来モ「何デ御マスラム」ト思ヒ乍ラ、世ノ中ヲ過シ候フ者ハ心ノ暇無キ様ニテ過ギ候ヒツルヲ、今日シモ参リ合テ、何デカ愚ニハ思ヒ奉ラム。
(③四八六・3~5)
- (2) 「人ノ見給フニ、御様モ異様ナレバ、我レコソ何ヲモ奉ラムト思ヒツルニ、此ハ何デカ給ラム」トテ不取ヌヲ、「此ノ年来ハ、『倡

フ水有ラバ」ト思渡ツルヲ、不思係ズ此ノ人、『具して行カム』ト云ヘバ、明日ハ不知ズ、随テ行キナムズレバ、形見ニモ為ヨ」トテ、泣々ク取ラグレバ、「此形見ト仰セラル、ガ忝ケレバ」トテ、得テ去ヌ。
(③四八八・4~8)

越前国敦賀女、観音助給事 卷九ノ3

- (1) 年比も、いかでかおはすますらんと思給へながら、世中過し候らふ人は、心と違ふやうにて過ぎ候つるを、今日、かゝる折に参り合ひて、いかでかおろかには思ひ参らせん。(③二七・1~3)
- (2) あやまりて人の見奉らせ給に、御さまなども心憂く侍れば、奉らんとこそ思ひ給うるに、こは何しにか給はらん」とて取らぬを、「この年比も、さそふ水あらばと思ひわたりつるに、思もかけず「具して往なん」と、この人の云へば、明日は知らねども、したがひなんずれば、かたみともし給へ」とて、猶とらすれば、「御心ざしの程は、返くもおろかには思給まじけれども、かたみななど仰らるゝが、かたじけなければ」とて
(③二八・8~13)

▽ 思ヒ／思給へ 思ヒ／思給うる (なし)／思給

② 越前守藤原孝忠侍出家語 十九卷第13

「後生ヲダニ助ラム」ト思ヒ給テ、「出家シ候ナム」ト思給ツルニ、戒師ニ可奉キ物ノ露不候ザリツレバ、今マデ不罷成シテ候ヒツルニ、此ク思ヒ懸ヌ物ヲ主ノ給テ候ヘバ、無限ク喜ク思給テ喜ビ乍ラ此レヲ布施ニ奉ル也。
(④一五二・12~14)

高忠侍、歌読事 卷十二ノ12

後生をだにいかでとおぼえて、法師に罷ならんと思侍れど、戒の師に奉るべき物の候はねば、今に過し候つるに、かく思かけぬ物を給たれば、限りなくうれしく思給へて、これを布施に参らす也。

(③三〇五・5~8)

▽ 思ヒ給へ／おぼえ 思給／思侍れ 思給／思給へ

③ 清滝河奥聖人成慢悔語 卷二十第39

水上ヨリ常ニ水瓶飛ビ来テ、水ヲ汲シヲ怪シク見給ヘテ、「何ナル人ノ水瓶ニカ有ラム」ト尋ニ参タルニ、御ツルヲ見給ヘテ、「試ミ申サム」ト思テ、加持シ申ツルニ、此ク極キ目ヲ見給ヘツレバ、返ク貴ク、忝ク思ヒタテマツル。今ハ御弟子ニ成テ仕レム。

〈三〇一・10～11〉

清滝川聖事 卷十三第13

此程、水瓶の来て、水を汲候つる時に、いかなる人のおはいますぞと思候て、見あらはし奉らんとて参たり。ちと心み奉らんとて、加持しつるなり。御ゆるし候へ。けふよりは御弟子に成て仕侍らん。

〈三四四・3～5〉

▽ 見給へ／(なし) 見給へ／(なし) 見給へ／(なし)

④ 依勸文左右大將可愼、枇杷大臣不愼語 卷二十第43

大將殿ヨリハ、春日御社山階寺ナドニ御祈様々ニ候ヘバ、「殿ヨリ仰セ給ハムズラム」ト思ヒ給ヘテ、待候ツルニ、音無ク候ヘバ不審思給ヘテ、急ギ参候ツル也。

〈四三〇六・9〉

大將愼事 卷十四第9

右大將殿は春日社、山階寺などに、御祈さまぐに候へば、殿よりもさだめて候なと思給て、案内つかうまつるに、さる事もうけ給はらずと、みな申候へば、おぼつかなく思給て参候つる也。

〈三六五・3～4〉

▽ 思ヒ給へ／思給 思給へ／思給

⑤ 陸奥前司橘語則光、切殺人 卷二十三第15

走懸テ詣来ルヲ盗人ナメリト思給テ、相構テ打チ伏セテ候ヒツルガ、今朝見給フレバ、己を、「年来便有ラバ」ト思フ物共ニテ候ケレバ、「敵ニテ仕タリケル事也ケリ」ト思給テ、シヤ頸取ラント思給テ候フ也。

〈四三三三・5～7〉

則光、盗人ヲ切事 卷十一第8

走続きてまうで来つるを、盗人なめりと思給へて、あげくらべあせて候也。今朝見れば、なにがしを、見なしと思給ふべきやつ原にてさぶらひければ敵にて仕りたうりけるなめりと思給れば、しや頭どもをまつて、かくさぶらふ

〈二八三・8～10〉

▽ 思給／思給へ 見給フレ／見れ 思フ／思給ふ

思給／(なし)

⑥ 駿河前司橘季通、構逃話 卷二十三第16

侍共ノ出来リ候ツレバ、「今ハ然リトモ出サセ給ヌラム」ト思給テ、打棄テ此方様ニ参合候ツル也。

〈四三五六・14〉

季通、欲違事々 卷二ノ9

人々いでまうできつれば、「今はさりともし出させ給ぬらん」と思て、こなたさまに参りあひつるなり。

〈六一・6〉

▽ 思給／思

⑦ 広沢寛朝僧正強力語 卷二十三第20

己ハ佗人ニ候フ。寒サ難堪ク候ヘバ、其奉ル御衣ヲ一ツニツ下シ候ハムト思給ル也

〈四三六三・16〉

寛朝僧正、勇力事 卷十四ノ2

わび人に侍り。寒さの堪へがたく侍に、その奉りたる御衣、一二おろし申さんと思給なり。

〈三五〇・16〉

▽ 思給ル／思給

⑧ 相撲人大井光遠妹強力語 卷二十三第2

- (1) 大キナル箭篠ノ節ノ許ヲ、朽木ナドヲ碎ク様ニ、手ヲ以テ押給ツルヲ見給ヘツレバ、奇異テ、「此許ノ力ニテハ腕折り被碎レヌ」ト思給テ、逃候ツル也。

〈④三七五・8～9〉

- (2) 「例ノ女ゾ」ト思テ、「極キ質ヲモ取タルカナ」ト思給ツルニ、此御ケル人ヲ不知奉ニナシ。

〈④三七六・2〉

大井光遠妹、強力事 卷十三ノ6

- (1) 大なる矢篠の節を、朽木などのやうに押し碎き給つるを、あしと思テ、逃候つるなり。

〈三三〇・7〉

- (2) 女と思テ、いみじき質を取たと思テあれども、その儀なし。

〈三三一・1〉

▽ 見給ヘ／(なし) 思給／思 思給／思

⑨ 安部晴明、随忠行習道語 卷二十四第16

- (1) 只今此道ニ取テ止事無御座ス由ヲ承ハリテ、小々ノ事習ヒ奉ラムト思給テ、参り候ツル也。

〈④四二一・11〉

- (2) 止事無御座ス由ヲ承ハリテ、「試ミ奉ラム」ト思給テ、参り候ツル也。

〈④四一三・11〉

晴明ヲ心見僧事 卷十一ノ3

- (1) 此道に、ことにすぐれておはします由を承テ、せうぐ／習ひ参らんとて、参りたるなり。

〈④二六九・13〉

〈二七〇・13〉

▽ 思給／(なし) 思給／(なし)

⑩ 藤原明衡朝臣、若時行女許語 卷二十六第4

己ハ、甲斐殿ノ雑色某丸ト申ス者候フ。殿ノ御ケルヲ不知給シテ、一家ノ君ニコソ御セ、殆極キ錯ヲナム仕り候ヒヌベカリシト。然々ノ事ニ依テ、窃ニ伺ヒ候ヒツルニ、臥所ニ当テ男女ノ氣ヒノ聞エ候ツレバ、然レバヨト思給テ、構ヘ寄テ、刀ヲ抜テ最中ヲ搜得テ、肱ヲ持チ上テ候ツル程ニ、月影ノ漏入タルニ、希有ニ御指貫ノ扶ヲ見付候テ、急ト思給ヘツル様、「己等ガ妻ノ許ニ、蜜男トテ此ノ様ノ指貫着タル人ハ、ヨモ不來者ヲ。人違ヘ仕タラムハ、極カルベキ事カナ」ト思給ヘテナム、肱ヲ引テ緩候ツル。

〈⑤一四・10～15〉

明衡、欲逢殃事 卷二ノ11

をのれは甲斐殿の雑色なにがしと申者にて候。一家のおはしけるを知り奉らで、ほと／あやまちをなむ、つかまつるべく候つるに、希有に御指貫く／＼りを見付て、しかく思給てなん、かいなを引しじめて候。

〈六五・3～6〉

▽ 知給／知り奉ら 思給ヘ／(なし) 思給ヘ／思給

⑪ 能登国堀鉄者、行佐渡国堀金語 卷二十六第15

佐渡ノ国ニハ金ノ候ナメリト見テ給ヘシ所ノ候シヲ、事ノ次ニ己ガドチ申シ候シヲ、

〈⑤六五・10〉

佐渡国ニ有金事 卷四ノ2

佐渡国には、まことに金の侍るなり。候ひし所を見置きて侍るなり。

〈二一〇・4〉

▽ 見テ給ヘ／見置きて侍る

⑫ 利仁軍若時、從京敦賀將行五位語 卷二十六第17

利仁、打咲テ、「試ムトテ思給ヘテ申タリツル事ヲ、実ニ詣來テ、告候ヒケルコソ」トイヘバ

〈⑤七三・1〉

利仁、暑粥事 卷一ノ18

利仁、うち笑て、「物の心見んと思ひてしたりつる事を、誠にまうで来て、告げて侍にこそあんなれ」といへば
 (三六・13)

▽ 思給へ／思ひ

13 川原院融左大臣霊、宇陀院見給語 卷二十七第17

家二候へバ住候フニ、此ク御マセバ添ク所セク思給フル也。何ガ可仕キ
 (九五・11)

河原院二融公霊住事 卷十二ノ15

家なれば住み候に、おはしますがかたじけなく、所せく候なり。
 いか仕べからん。
 (三〇七・7)

▽ 思給フル／候

- | | | |
|---------------|----------|----------|
| ① 思ヒ／思給へ | 思ヒ／思給うる | (なし)／思給 |
| ② 思ヒ給／おぼえ | 思給／思侍れ | 思給／思給へ |
| ③ 見給へ／(なし) | 見給へ／(なし) | 見給へ／(なし) |
| ④ 思ヒ給へ／思給 | 思給へ／思給 | |
| ⑤ 思給／思給へ | 見給フレ／見れ | 思フ／思給ふ |
| ⑥ 思給／(なし) | | |
| ⑦ 思給ル／思給 | | |
| ⑧ 見給へ／(なし) | 思給／思 | 思給／思 |
| ⑨ 思給／(なし) | 思給／(なし) | |
| ⑩ 知給／知り奉ら | 思給へ／(なし) | 思給へ／思給 |
| ⑪ 見テ給へ／見置きて侍る | | |
| ⑫ 思給へ／思ひ | | |
| ⑬ 思給フル／候 | | |

右の「今昔物語／宇治拾遺物語」の「給フ」使用の有無・異同等のパターンは次のように整理できる(原文の表記にとらわれずに「給フ」使用の有無、代替敬語がわかるよう略記し、出度の数値を添えて示す)。

今昔物語／宇治拾遺物語

(1) 見給／(なし)	4	(7) 思給／おぼゆ	1
(2) 思給／(なし)	4	(8) 思／思給	3
(3) (なし)／思給	1	(9) 思給／思侍	1
(4) 思給／思給	6	(10) 見テ給／見置きて侍	1
(5) 思給／思	4	(11) 知給／知奉	1
(6) 見給／見	1	(12) 思給／候	1

前掲の「同文的同話」を用いて今昔物語と宇治拾遺物語の「給フ」を対比し観察した結果からは次のよう事実が明らかにされる。

- ① (1)(2)(3)は対応部分の文脈の相違により、両説話集のいずれかが共通の上位動詞を用いた表現を欠くため考察の対象にはならない。
 宇治拾遺は筋運びが簡略ゆえに上位動詞を用いた表現を欠くケースが多い。(4)は共に「給フ」の使用が見られるもので、宇治拾遺はなお「給フ」が残存し使用されたことを示す。
- ② (5)(6)は宇治拾遺に「給フ」の使用が見られない。また、(7)も敬語のない類義語に置き換えられたもので、(5)(6)に準じて共に「給フ」の消えた無敬語表現と見ることができる。
- ③ (9)～(11)は宇治拾遺では「給フ」を他の敬語(「侍る」「奉る」)が代替している。また、(12)も「思ひ給フ」が「候」に置き換えられたもので、(9)～(11)と共に「給フ」の使用を避けた敬語表現と見ることができる。
- ④ (8)は逆に今昔物語に「給フ」の使用が見られないが、この用例の本文が漢文訓読調の強い物語前半(本朝仏教部)の話であることに関わるかとおもわれる。

前述したように「源氏物語」の写本、「仮名書き法華經」の諸伝本においては「給フ」の衰退期には「給フ」の消えた無敬語表現が見られ、また別な敬語表現に置き換えられる様相が認められた。右の②及び③からは、宇治拾遺物語においても「給フ」の衰退が同一の過程を辿っていることが看取されるのである。

さらに詳細に見るならば、(6)の無敬語表現、及び(10)・(11)の他の敬語表現の代替が「見る」「知る」など「思ふ」以外を上位動詞とする場合に必ず見られることが注意される。即ち、宇治拾遺物語においては「給フ」の用法は上位動詞が「思ふ」に限定される方向を辿りその用法が「思ひ給フ」に限られるに至る経緯が認められるのである。

五 結 論

今昔物語(院政期)の「給フ」は中古の用法に加えて、中古には見られない上位動詞への接統例があり、また命令形以外のすべての活用形が見られるなど、活力を備えた語であったことが窺える。

宇治拾遺物語(鎌倉初期)は一般的には和文系説話集と見なされ和文的な語彙・語法の使用が期待されるが、「同文的同話」を通して今昔物語と対比、観察した結果、「給フ」には衰退の兆しが認められた。

また、その衰退の過程は、「源氏物語」と「仮名書き法華經」との各書写伝本の間に見られた「給フ」の衰退過程と軌を一にすることが明らかになった。さらに宇治拾遺物語においては、無敬語表現及び他の敬語による代替が「見る」「知る」を上位動詞とする場合に生じたため、「給フ」は「思ふ」に接続する用法に限られるに至った経緯を確かめた。

以下には「思ひ給フ(謙讓)」という、いわばマイナーな語法が存在、存続し得た事情についての考察を付け加えたい。先に仮名書き法華經

の一本(足利本)で、四段化した「給フ(謙讓)」が「給ふ(尊敬)」と衝突しつつも並存し得た事情については石井文夫氏の論があるが、^{注12)}特殊な語法の存在、存続にはこれを支える然るべき根拠、事情があったと考えられる。

「思ひ給フ(謙讓)」という語法が存在、存続し得たのには「思ふ」の尊敬体、対立的な尊敬動詞——「おぼす」「おぼしめす」「おぼほす・おもほす・おもほしめす」の用例はみあたらない——の存在したことが関与していたのではないか。即ち、「思ひ給フ(謙讓)」は「おぼす」「おぼしめす」という尊敬動詞に對置する謙讓体として一連語と意識されていたのではないかと考えられる。

宇治拾遺物語には「思ふ」の尊敬体として「おぼしめす」18例、「おぼす」25例、「思ひ給フ」2例が見られる。

▽おぼしめす(全18例)

ことさらおぼしめさる、やう有。

(八八・七)

▽おぼす(全25例)

このあらまきをば惜しとおぼさば、

(九五・二)

▽思ひ給ふ(全2例)

わかきぬしたちは、げに、あやしと思給らん

(一一・11)

即ち、宇治拾遺物語においては、「思ふ」の敬語表現として次のような語彙論的な対立構造があったと考えられる。

思ふ — 尊敬表現「おぼす」「おぼしめす」……………(尊敬動詞)
謙讓表現「思ひ給フ」……………(連語)

このような関係に支えられて、謙讓の補助動詞「給フ」の唯一の用法である「思ひ給フ」は命脈を保ち得たと考えられるのである。

注

(注1)

根来司氏は夙に次のように述べている。

下二段の「たまふ」は、院政時代を境に急速に衰退した補助動詞である。『宇治拾遺物語』『沙石集』『古今著聞集』などの説話文学や、『松浦宮物語』『閑居友』『増鏡』などの和文体の作品群に用例が見られるだけである。鎌倉中期には口頭語としての勢力を失い、古語として記憶せられたに過ぎないのであろう。〔下二段活用の補助動詞「給ふ」の変容〕(『国語と国文学』昭和38・8月号)

(注2)

根来 司『源氏物語枕草子の国語学的研究』(有精堂・昭和52)〔四九、五〇頁〕

(注3)

中田祝夫編『妙一本仮名書き法華経(翻字篇)』(佛乃世界社・平成元)

(注4)

中田祝夫編『足利本仮名書き法華経(翻字篇)』(勉誠社・昭和51)

(注5)

野沢勝夫『仮名書き法華経』研究序説』勉誠出版・二〇〇六年〔四一、六二頁・三一四、三三九頁〕

(注6)

萩原義雄『西来寺本仮名書き法華経(翻字篇)』(勉誠社・平成6年)

(注7)

山田 巖『院政期言語の研究』(桜楓社・昭和57)〔一一八頁〕

(注8)

岩井良雄『日本語法史(鎌倉時代編)』(笠間書院・昭和46)〔二七七頁〕

(注9)

旧日本古典文学大系『今昔物語集』四二二頁〔補注二五〕

(注10)

根来 司『源氏物語枕草子の国語学的研究』(有精堂・昭和52)〔一一二頁〕

(注11)

根来 司『源氏物語枕草子の国語学的研究』(有精堂・昭和52)〔一一一、一一四頁〕

(注12)

石井文夫『四段活用をする助動詞「たまふ」をめぐって』(中田祝夫博士功績記念国語学論集)所収)〔一一四頁〕